

## 『いそ枕』

—手銭家所蔵資料紹介(三)—

佐々木 杏 里

(公益財団法人手銭記念館)

### 摘 要

出雲市大社町手銭家に伝来する俳諧資料の中から、『いそ枕』を紹介する。この資料は、大社における文芸活動の実態を見る上で、多くの示唆を与えてくれる貴重な資料である。

キーワード・いそ枕 俳諧 杵築文学 手銭有秀 手銭記念館

### はじめに

『いそ枕』は、出雲大社の西、いささの浜(稲佐の浜か)から船出して博多までは海路、博多からは陸路で長崎に至る紀行文の草稿で、全体に推敲が施されている。本文、推敲部分はともに同一人の手であり、手銭家五代有秀の筆跡と見て差し支えないように思われる。

昨年紹介した手銭有秀の自選句文集『もくづ集』にある「いそ枕の後序」で、有秀が露丸という人物から、『いそ枕』を清書してほしいと頼まれ、断りがたく引き受けた、とあることから、『いそ枕』の作

者は露丸であり、この草稿は、依頼を受けた有秀が書写した上で、推敲したものとなしなして良いだろう。

『いそ枕』は、杵築文学の俳諧活動における俳人同士の関係性など、具体的な実態を見せてくれるという意味でも、貴重な資料なのである。

### 〈書誌〉

書型……写本。仮綴じ一帖。

表紙……本文共紙。

寸法……縦二一・七cm。横二九・七cm。

題簽……中央無辺。「いそ枕」と墨書。

序跋なし。

字高……一八・四cm。(本文巻頭「しらぬひ……思ひ立て」を計測)。

丁数……全一三丁。

〈解題〉

作者と思われる露丸の具体的なプロフィールは分からないが、手銭家五代有秀の参加した句会や連句会の詠草の中には、露丸の名前も散見される。また、手銭有秀追善集『追善花叢粟』では、追善句として日々庵浦安に続いて松茂亭露丸の句が載っていること、広瀬百羅追善集『あきのせみ』では、露丸が有秀と共に「立連」の一人として句を寄せていることなどから、二人は同門の俳諧仲間であり、極めて親しい友人でもあったと推測できる。

同じ「立連」に属していたということは、住まいも手銭家と同じ大社町立小路だったのではないだろうか。

推敲を依頼していることから、文芸に関して有秀を深く信頼していたということも言えそうである。

有秀は推敲のための草稿を書写して手元に残し、清書した『いそ枕』を露丸へ渡したのだろう。本資料は本文だけが、『もくづ集』に「いそ枕の後序」(後掲)があることから、清書された『いそ枕』には、序、後序が付け加えられ、或いは跋文まで備えたものだったとも想像される。

十八世紀後半から十九世紀前半にかけて、杵築の俳人らの間で『いそ枕』のように、互いに序文、跋文なども書き合ひ、一冊の本として仕上げるということが盛んに行われていたのかもしれない。

『いそ枕』と『もくづ集』によって、手銭家蔵書に含まれる、幾帖かの同様の草稿、下書きについても、新たな視点を提供できるのではないかと考えている。

いそ枕の後序

呉楚に魂をはしらするにはあらで、もろこし近き旅寝せし露丸のぬしか、心つくしの家つとに、かの釣連のなかめを記して頭陀の底にかくしをけるを、此ほと予に清書せよとなり。されと、かなのけちめもしらぬ身の、山鶏をもて鳳凰と呼ふに似たれば、ふかく辞すれともゆるさず。もとより人に見すへきにもあらされハ、旅のつかれをもたすけむとて、終に其需に応してつたなき筆を染るならし。于時寛政十午晩夏日 (『もくづ集』より)

〈凡例〉

翻刻にあたり、私に句読点を補い改行も適宜改めた。概ね通行の字体にあらためたが、一部原本の表記を残した。

原本の各丁片面の終わりに当たるところに「」をつけ、( )内にその丁数および表・裏(オ・ウ)を示した。

推敲部分については削除箇所、訂正箇所ともに左側に「ク」点が打たれ、変更は右側に書き加えられているが、概ねそのまま表記した。ただし明らかに書き損じと思われる部分については、訂正後の本文のみを翻刻した。

難読の箇所は文字数に見合うよう□で示した。  
参考のため、原本の図版を最後に示した。

〔翻刻〕

〔表紙〕

いそ枕

〔白紙〕

〔表紙見返し〕

しらぬひのつくしのかたに思ひ立て、臯月初の九日いさゝのはまより舟を出す。日ころしたしき友たちむれ来りて、饞別せんとて彼の海辺たにむしろして酒など汲かはしつゝ、しはしの名残をおしむに、ほとなく舟人来て船にとむるにそ

涼しさを残して船に乗りけり

風は追手なれば舟のはやき事（1オ）宛もゐる矢のごとくして、ほとなく角さふる石見の国大まの沖となん。

出越かなたは雲の中にへたゝり、今更心ほそくそおほゆえて

ふらぬ日も心曇るや梅雨の旅

涼風のまに／＼近き故郷かな

なと思ひつゝ、けて、それより楫を枕にしてしはしとてまとろみけるか、夜半ともおほしき時分碇を卸す（1ウ）音に夢さまされ爰はいつこと思へは長浜となん。

長浜や長からぬ夜も明しかね

明る十日長浜の纜とき払ひ、行へきかたに舟をむけけるに風向より吹来て五里斗も吹戻されつゝ、遂に浜田の湊に入ぬ。

帆に苗なうちそ浜田の女とも

十一日雨ふりて苦の雫を侘て（2オ）

傘から隣もなみの五月雨

十二日雨もやみ風も直りければ浜田の湊をいて行に、高嶋といへる沖中にて夜もはやあけなんとすれは

戸をたたく音高嶋の水鶏哉

十三日長門の国みかとの沖にて

夜の明て草にかくるゝいさり哉

十四日筑前の国鐘の御崎に至りけるに波風荒くなりてあしやとなん（2ウ）いへる沖に碇を卸す。

波風の折もあしやの行く子

十五日風も可ならんとて帆をあけるに飛ふかごとくに、津屋崎といへる沖に至て俄に雨風はけしく、又爰に舟をとみしけるに此ほとのかれにや、舟人心わつらはしくもの喰さしてふしぬ。我ひとり海の面を守り居て（3オ）

海原や水も濁らす五月雨

すてに夕陽にかたふきぬれはこゝろならずも枕を叩く。

みな起よ我も寝ふたし五月雨

その夜は相の嶋の波を枕とす。

よし雨はやますとまゝにほととぎす

十六日空も穏やかなれば、相の嶋の名残をおしむにことにそならむ

短夜や又来てねんと思へとも（3ウ）

行て鹿の嶋の沖に至りけるに此岡に社あり。鹿大明神と申奉るとよし。船の内にぬかつきて

吹弊に呼な鹿子のたはふれん

ほとなく博多の川口にのそみけるに、向より小船来てこなたの船に綱打かけぬ。何人と問へは博多の石見屋何某とて兼て聞しりける人なり。其俣小舟に乗て家につれ帰つて（4オ）長途のつかれを労はられて

『いそ枕』―手銭家所蔵資料紹介（三）―（佐々木杏里）

帆の風をかえて涼しや蚊屋の浪

十八日にわもよく太宰府へ詣奉りて

まつ梅の一しほ涼し夏木立

宮中の葉景云いつくしかたく、筆をと、めてそこ爰見めぐりけれ。飯

など取出てしはらくやすらふ。かへて一里斗り戻りて衣捨の天神と

なん詣拜し奉る。(ウ)

ぬき捨て俄涼し梅か□

それよりはかたの町に歸りて綱輪の天満宮をおかみ奉りて

寄来るも綱を頼みや涼舟

十九日かねて頼ける事とも調ひければ、けふは長崎のかたに杖をひか

んと思ふに、旅のつかれもいまた休まらぬをと、あるしいと懇にと、

めければ、はしめて来たるに(ウ)かく情ふかきうれしさにまたと、

まりぬ。

うき旅を誰か云らんほと、さす

箱崎の八幡宮は名にしほふ所なれば、拜み残すもほみなしと、す、め

のまにく笠打かふりて、はかたの松原を行尋し。宮内にたとりつけ

は、き、しにまさる宮柱石燈籠金燈籠、弓手馬手に立並ひ、(ウ)樹

木の涼み境内の風景えもいはんかたなく口を閉て眼はたかりけり。

此あたり虫も見えず夏の月

玉垣の外に松あり。むかし戒定恵の三学をこかねの箱に入れて納めたる

より印の松といへるよし。

あら涼し拜む印の松の陰

廿日博多を立て一つの橋を渡るに、此川は袖の湊といへる

涼しさを袖につ、まん波の玉(ウ)

の古語なるよし  
なればし

浮めには名もたよりありけらしと、こゝろおかしくて

傾城の袖の湊や合歓花

夫より福岡といへる城下を見迎りて姫ヶ浜に至る。

爰は松浦小夜姫のふることなど聞伝へ侍れとも道のいそきに間残

しぬ。

恋にくちや石となりても  
いと捨て、ちぬ名や石に咲昔の花

など吐ちらし二里斗りも歩みつらん。(ウ)

道のかなたに一つの高山あり。つくし富士といへり。東海道の一筋も

しらぬ身なれば、するかのふしは画しをそらことと思はさりきに今は

た此山をも画は三保の松原、清見峠なとこそなけん。いさ、か彼の山

の形に異ならんや。

画たるふし猶高し雲のみね

雪の宮をかさね出たり雲の峯

けふは十里斗りも歩みてよし井と(ウ)なんいへる里に舎をもとむ。

まつられし茶にもよし井のしみつ哉

廿一日吉井を出て浜崎唐津などいへる所を行へし肥前の国の入口に白

の関となんつくほうさすまたなど立並へ往来の人を改るといへは、爰

に笠をとりて

口墨の猶はつかしや白の関

関守の人の風流を聞いてひそかに(ウ)此句をかひ奉て残置。夫より一

里斗り行て伊水の里に至る、爰の出雲屋何かしを尋て杖を

預けはへりぬ。

薫り深ふ花見尉たり木下関  
以中

笠もゆるせよ旅の夏疲  
露丸

廿二日長崎のかたに行んといふに此道は石河多く雨の日は猶行ことあやうしとしきりにとゝめたる。

廿三日も雨なをやます。後の川にかけ造りして(8オ)涼みなとする所あり。爰に出てにわを窺ひけるに

蓑干といふ日もあるに五月雨

ほのかいづかりて蓑干の羽衣にきこゆ山の端の蟬

以中  
露丸

今宵は月待とて宿にとなれる里笛など沙汰して、あるし題を探るへしと益てあるしすむるまかせてとりあへずにもみ□して茶など汲せけり(8ウ)

まとゐして月を松まのうら涼し

露丸

京恥かしき山ほととぎす

以中

老たけにうは氣吐しをはやかに

里笛

酒は毒にもならぬものなり

丸

冬来ぬと山吹売はる触あかき

中

又おもひ出し雨のはらく

笛

### 当座探題

子を寝せて煙窺う蚊遣り哉

以中(9オ)

鶉飼舟水の流れにこゝろせよ

露丸

庭のるすの指もつやく松ヶ根百日紅

里笛

一口を枕にしたる清水哉

丸

雨雲は埋めて出たる雲の峰

中

寝るゝした隠家叩く水鶏哉

笛

菓子買て母にやりたき鹿子哉

丸

風鈴の陰を枕や夏の月

笛

骨折らぬ葉とは見えず海月取

中(9ウ)

廿四日、雲も晴れければ伊水の里を出て園木といへる駅に至りぬ。是

『いそ枕』―手銭家所蔵資料紹介(三)―(佐々木杏里)

より時津といへる浦まで七里の渡しなるよし。折ふし風もあらくし、船もわたさぬといへは陸路を尋るに、道のほと遠ければとて終に此里に止まりぬ。

夕立やもの思はせる河向

廿五日、船を出すと聞て海辺に(10オ)出るに、船ははや一丁斗りも漕出しけるを声をかきりによひもとして、縄引よせて飛乗ぬ。行て二

里斗りも沖に出て、乗合の人とおのか国々のはなしなとしておかしく

しけるかなたに、一人の異僧あり。仏道すきやうの人とも見えず。又

くすしとも猶思はれず。何人と問ければ我は東氏の山人呂白坊と答ふ。

いと(10ウ)うれしくも膝すり寄り日終の風待に、ほとなく船は時津

の浦に着ぬ。日も既にたそかれに至れば、急ぎ舍りを求めんともの言

さして別れける。今宵は時津の浦に泊りて

隣へも出られず旅の蚊遣哉

廿六日、時津より長崎には三里に近き道なるよし。朝も静に立て彼の僧の旅宿を尋ねければ能ぞ(11オ)待呉たりとて悦ひともに頭陀を持

相て、けふも好の風俗に紛れてほとなく長崎に至りぬれば、再会をち

きりて、互に心あての宿など書付取かはし眼をとちてわかれける。

かくて、五嶋町、山下何か許に暫く頭陀をと、めんとして

涼しさや何の樹を吹山下風

廿七日、旅の疲をなくさめんと笠(11ウ)引提出て出かけ諏訪明神に詣

海原も氷る光りや月の霜  
夫より爰かし寺く  
あまたの社院ふし拝みめぐり、殊更唐土人の造建したりとて福鷹とい

へる大元に詣けるに、殊に此国の風景には似る所もなく、夫より唐人

屋敷、阿蘭陀屋敷などめくけるに、あやしき糸の音いろもいとめつら

かに(12オ)聞なされ、又酒宴のよそほひなどは、更に此国のひとに

かはらねと、屋敷の外に出ることも叶はず、一連の外は物いふ事もあ  
たはずとかや。即、わつかに百の東里を隔てる事たに故郷をとふ心せつなるに、  
いはんや数千里の蒼海をわたり来て、爰に夕陽を送るは、何のために  
なせることそや。皆是世渡の葉はならんからも大和もひとしきは(12ウ)  
此境なりと感するの余りに、此ほと光陰のああらあましあをやたてのすみに香筆  
をかみて、友たちのみやけにとかいつくるもおろかなる身のすさひ  
と恥かし。

花もなくしけるはかりそ笑草(13オ)

#### 付記

本稿作成にあたっては、立正大学 伊藤善隆氏のご論考(「翻刻・手  
銭記念館所蔵俳諧伝書(一)―手銭記念館所蔵俳諧資料(二)―」(『湘  
北紀要』三五号、二〇一四年三月)、「百羅追善集『あきのせみ』―手  
銭記念館所蔵俳諧資料(三)―」(『山陰研究』第七号、二〇一四年  
一二月)、「翻刻・手銭記念館所蔵俳諧伝書(二)―手銭記念館所蔵俳  
諧資料(四)―」(『湘北紀要』三六号、二〇一五年三月)、「衝冠齋有  
秀追善集『追善華鬘粟』―手銭記念館所蔵俳諧資料(五)―」(『山陰  
研究』第八号、二〇一五年一二月)、「俳諧史の中の出雲・大社・手銭  
家」(『平成26年度出雲文化活用プロジェクト報告書』)におおいに助  
けられました。

また、伊藤善隆氏、島根県立古代出雲歴史博物館の岡宏三氏、松本  
美和子氏には多大なご助力、ご助言をいただきました。記して感謝申  
し上げます。

本稿は、山陰研究プロジェクト「山陰地域文学関係資料の公開に関

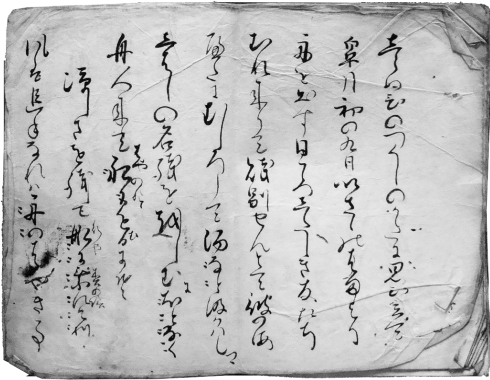
するプロジェクト」(二〇一三～二〇一五年度、代表・野本瑠美)、同  
「山陰地域文学関係資料の研究」(二〇一六～二〇一八年度、研究代表  
者・野本瑠美)、国文学研究資料館基幹研究「近世における蔵書形成  
と文芸享受」(代表・大高洋司)による研究成果の一部である。

〈参考図版〉

1. 表紙



2. 巻頭



『いそ枕』—手錢家所蔵資料紹介(三)—(佐々木杏里)

# **“*Isomakura*” - reprint and introduction ; Documents of Tezen Family Archives (3)-**

SASAKI Anri  
(Tezen Museum)

## [Abstract]

To reprint and introduce "Isomakura" written by Tsuyumaru , polished by Arihide Tezen. "Isomakura" is a valuable material to know about haikai poems in the Taisha region of Edo period.

Keywords : Isomakura, haikai, Kiduki-Bungaku, Tezen Arihide, Tezen Museum